二 [illegible]

内閣文庫

三の巻

昭五雄

寄深

植枝ふ爲のとゝまりに秋の雲

秋くれ行ゆく方の雲里

信濃の国桜ふ爲のとゝまりに九月の雲に八雲に八

きりこめり農人等の帰るべき路と時雨を定め雲を

うち除ふるなり叶集方に体なるとゝまりへの雲に

遠方

月花の恐る升こゝ丸山

帝室図書寮文庫

[illegible]市丸人[illegible]

俗曰[illegible]の風[illegible]を[illegible]と[illegible]

男人の[illegible]を[illegible]師走の[illegible]を[illegible]

[illegible]白き[illegible]大[illegible]を[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の[illegible]

[illegible]

俗曰秋の[illegible]

[illegible]

比叡

秋[illegible]

[illegible]

俗曰[illegible]秋[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七[illegible]七[illegible]堂[illegible]

[illegible]

俗曰[illegible]七[illegible]

[illegible]

二条殿宴を所の名所を京名を見侍る梅笠を
新保氏心閑居の主對之常ゆゑすきゐる

五月雨

五月雨や時のつくゝちらひ松て
名の名のあとはなりけり

連歌

梅ゆゑの名の木この梅の花朱雀
多の古業はさふかくれ立
あこゝろ祇園てやをつをあ
枝をたゝさめ花の都か
連歌
遠さくら伊山の麓の麓しる

梅のてふは當ハ何水もてふ
ふ作ゝ之し花の梅の梅をなる
ちゝ之し爰ふ之ゝの梅ゆ者
ゝゝみと云ゝ者大ゝゝみゝハ
係を梅を梅ゆて爰の梅や
梅ゝ梅ゝゆを云ゝ者一而爰
傳の句ハ云ゝ爰今よきゝて
甘ゆゝ他ハ理て云ゝ
やゝゝ云ゝを少ゝゝ
古の句ゝ梅梅梅爰爰ゆ

ゝゝ過て句を除作ゝ梅
なゝゝあゝゝゝゝ
ゝ者一ゝ大ゝゝゝ二ゝゝ
梅ゝ爰ハ爰ゝ
梅ゝ爰ゝ又ゝ
ゝゝゝ又ゝゝ
ゝ枝ゝ芹ゝ
ゝ他ゝ
ゝゝゝ
ゝ移徙

されと発句の姿まさ世手俗の世界よりなるべし但百
句等の句は千句万句の時は好て長き者の例なる好ま
しき方は発句は陽こ句は陰こ韻字を慎るべし和合の
心弱し又さし出る様こ句万句ともに出る天地わ
合て二の世界なる句弁三界にてなるべきもの

原性秘のうち

先師曰句案を陰る時主句を表し第一句を下
の句案に引き句を引き第一句造は百世百中すて
句案をとふるべ主句は第一へ連歌ふ
秋はなを久まくこそたるるね

萩の上丸し　萩の下露

はるを発句とすれとも上下連続る今あるなり
世を押て初しは発句一句なれとはなき句
と心得しかは彼なれとも句なるとふは皆ひらるべ

紹澄句

市中も遠き山もかすみ月
はつしくとなつかしの春
梅の香の山とも岩山路ぐら
とそろそろ鶯の鳴らん
庚什梅の香の山路きるる春

池うちうて雪降りて
春の雨もいとゞ刷ものあはれなる
初瀬詣の本の名ふたつまる
うゝ色見る彩りさすと世降る
永ちうちらく雲の輝うき
隙撥ふこゝきうて朝ぬ
雪降るかるの百船
岩に花撥の掛思ふ雲なり
古雨なるうち雪る日の色
形らこゝる撥よこゝの色表

四うゝ
餘別

見るもの
杉の
芦屋の
西行
大和
雪降
古人
第三社

袁記

詩の記法は人事を叙するなり故に又無為なるを貴とす
然れども陰陽天地の比を以て天地の人を生じ人
の四民の分るゝが如くして中に六義句絶と二句とのこと
第句のことを以て生物を人間はるゝ時第第子四を以ふ
へ一物物を以て物を比ひ第句を造ひ第句と微細
の物才を以て物を比ひ一句又句のこと

移形のこと

むかし崔日知なるものあり
作句移形句の要に称言に形の如く中ふくらむ
ものなるを以て心句を作るむかし崔なるものと句の心体

やうに作りて日和なるを七文字加へたる是を二句共に
平句と称ずるなり文字なきなり

古山のこと

杜甫風雅の新の通ひなく
作句古山を来山を出きたる所を作らんとする者
なり句作の雅の新の通ひなくして句作の雅の新の風と
加へたる又杜風を意ふ句を加へて警ふ雅兵の働く
如しと平句の中に風を表すなり古人の
中を味ふべし

武蔵の山を富士中を北中を北

申さてはなるまじきなり。
かゝる道にはあらぬを世俗にしまてを通ふとは
いへとふいなを花のさかりぐ
世俗はまてを花の盛りとふをふと当りたりあらの
はあれ当時申さんとしは花の頃の清やうを満たるを
かすうまて也帯まて たるうまてをを仕立てはくるしう
さるをとをはいかなりぶのとぶ たるうぶとはいえれぬ
頃なり付句をはて味をうしし

申さんはなるまじきなり

申さんはなるまじ発句無石姉の時なし有石姉の時なし

へこうとは堅く古人の発句をこをこを石の発句はれ
言葉を言うて句言葉を作きをふをを字の申さは
句の姿何なふをまを物をふ石姉の発句の時は
ををせをを有石姉の発句は

魚住や雨よ西瓜ら会談の女

如何深も仏も生をを体ら句をしは為をを生るの意き
を婦ふ大切を三句の潮をををし給んらめ

もをを当なり

本の家ふるる入山の花もるし

是も有北をを言下ろし世俗の句とは言葉の庭

所はさうなを考へし付る本紙をちりとせいはまるこちらと
ちらる為大やうりてた山の白居こ
弟之よ留のるり
うちるひき為ふ芝多承きりる
白居の山のやこ之(こある山の得ふ
弟之はよ留ハ付の如く白之上下ゆるあるる仮るし
芝花和こ山の得よ弘のやこ之(こある又承きりる為花
芝多のうちるひきと為るき)付仮るれ仮るし
呉 姉弟之はるる
留るる仮ものも書もれもも

陣もまこ宮ら為仮弟之ら為仮
ちよ仮為ちてりる名為れた
ちと花仮小因るよち抜仮弟
抜為ちる花も弘ちる梨
世は頼宮留仮弟之ちて為樹沖弘宮机おのておえ
入ちる立文ちを下ちる為て頼宮留の俗文ちる葉門ま
て留てちちる芝ハ初心(おこ)こ
弘ちる弟之の大之ハ芝白仮ちる仮ちる陽弟ハ一物ま
あを部ま白居ちを係て古人て留ま宮むて留を
花白(年こ沿(およほ)てるを故ふて文宮元合

はいかるもなかりしん冨そのゆへなるを押て留る
るゆへなるしはなを解味ふるはかりて留まる限られ
ずこの袋なきゆへなる依るまゝ解く味をしし書く
及ばずてうえしされとは一時ハ深解すて為て弘るの
人ゆるをつるを返てもて留を主んをし

島山花雪の習歌俳句

宗伊　宗伊　宗祇　聚三

春　遠ゆて去るもなを名ゆ　政長

立ゆる梅本をみるのゆ　宗伊

多ゆる庵の山のみ梅ゆる　宗祇

皆人の全ゆ所ゆ花ゆ

なをを雪ををるき去の山の霞　祇

探さく梅ゆ雨ゆ降ゆ　伊

立年ゆ花ゆいゆの梅の中ゆ

多ゆ都ゆる庵のゆる風　伊

ゆ中ゆ八ゆの月も高ゆて　祇

皆ゆの立ゆ山ゆ去ゆ雨ゆ降ゆ

山ゆを去ゆ去の名ゆ勝

多ゆ橋ゆ川ゆをゆまゆ過ゆ

辰ゆゆ移ゆ雪ゆ降ゆ華ゆ　祇

伊

梅さくはるの春雨のふるまにうつろ
月影の入江の水にうきくるく
ちるをうらみぬ春の夜のうぐ
こゝのかゝ四つふ一年乃書
つれなき年の春も暮ぬ神つ波
咲ちるもよそ目にうきの春の
こゝろうつる色なる梅の香
夜の雨の春戸ふる窓
消るとき花ちるの春ぐ
世をうちるのきゝ高山のさき

伊勢
伊勢
伊勢
伊勢
伊勢
伊勢

梅ちゝ中とゝるを出の雨を井うて
根ゝるうゝる本の梅ゝ花さうう
ゝゝの古宮年ゝ雨ゝるこゝまて
奥ゝ山ゝ年を桜ゝの花ゝ
桜ちる梅ゝ年の春ゝ
花ゝてふやの風ゝ花ゝ
京ゝ夏ゝ雨ゝ言ゝ問ゝ
花ちりて雲ゝを越る木陰ぐ
外山の月ゝ出ゝ
雨ゝ白ゝ言ゝ梅の入ゝ所て

伊勢
伊勢
伊勢
伊勢
伊勢
伊勢

岩間をとをるこのとも彼
わたるかふかの水もえ（ら）
おすほのまに岩の山風を誘て
永き夜ふけ一ふきすのみとぶ　紙　伊

芝生の上をこそ吹らつるる
夏原の左右山あらしかなて　紙　伊

秋は深るまちの原の草花
もえ芝原はさらぬ色ふかて　紙　伊

あるまを入江の水の音新て
永き日の夕ふむ物の色永　紙　伊

ふる木ゝもるき寺柳の糸
立門ふ木るる人多き夏陰て　紙　伊

立ち出まるは心の雲霞
はるの色ふかてうるはしき　紙　伊

うちるひき音程雲の水ぎる
立ちる月ふ向ふ山もて　紙　伊

ゆたひ雲ふ花ふ蔭の糸
袖衣ふうて南ふ雲さめて　紙　伊

加ふ田ふ左ふ音ふ水ぶ
さんふ流ふて山の下　紙　伊

四月はつこうの花を見て

伊　はつこうの花を見せ国の秋

伊　こころの言葉のものの人

紙　雲の帰るゆくえうち詠て

伊　夏山きあたの陸あるもうあ

紙　川の夏のきをく旬の山きき

紙　夏きき時の桜き花ちりて

伊　前の花てはるうめ色もうあ

伊　山風のさく花のうき波

紙　ちえこうう夏ふかて波もう

紙　鶯のみのひき時の音の

伊　こうの春の雪の岩波

紙　夏きのの山の岩のあるもて

伊　下の花はるの春の春の

紙　ちらしく前のうるる春

伊　波の夏の花を岩根はちみて

紙　波さんちう心の春花ちる

紙　みきく花の波をまつん

伊　うくひすを伊人も鳴る秋

夏

立ちて花をこそ
ながめしかとうらに花を見つる
春ゆゑ柳桜の枝とりて
御のもとにうつしみやゐき宿のき
西の園辺に志ら菊のえ
迷
春ゆる雪の消ゆるにも思ひて
立ちて月をも見れば
よをかさねつるさとをば
山ふかみ人ぞ下ゐ水ぬるらむ
たかきをもとふ春の音なる

伊勢
伊勢
伊勢
伊勢
伊勢
伊勢

春の雨もそらにもとめ
春雨日をかさねつるに
春ふかみ花の白山の白山
さのみたにうゑる梅の枝
五月雨の雨の音の秋ぞ
やまとき世の鹿ぐるまの
梅をうゑしの春山の雪
谷はなれたくぐ水の音
ちりて苗ふる山田
ちる花の雪の中

伊勢
伊勢
伊勢
伊勢
伊勢
伊勢

能　能の川辺の蓮の花のこえて
能　夏草の色ふかくなる夏木立
伊　夏草のなかにさかる桔梗
能　清水や岩屋の夏の神さび
能　むらさきの色あざやかの桔梗
能　常盤木の夏木立
能　夏草の色ふかくなる
伊　一夏の百姓の水ぐるま
能　うゐ田の面に水ぐるま
伊　山畑の住居桃花（ウウキ）

能　本妻にて白ゆり花の下陰
伊　花ちるつまをいつくしみ
能　桔梗の花の面のあるかな
能　こゝろ〳〵に夏ひとしほ
伊　山ゆりのいつこの夏に結みて
能　蓮の葉の広葉の露の玉
伊　夏木立さして清水ときこえ
能　山こえいつく心の高ぶるまで
伊　夏草の一ときをあるる夏草

さてもゆめこそ覚めぬくれ　祇

秋風のつゆを落すや急ぐらん　伊

夕月の影にまよへる横雲の空

おひさきこもる宿の梢に　伊

憂世をば人も出る庵に住むらん　祇

涼しさを忘るゝほどの夏衣

まちし扇に風ぞのこれる　祇

夢路より見し月やかれてうつむらん　伊

夕立のあとは河瀬のかはりけり

秋の一夜も流れて　伊

有明に鴫もなくなり山陰　祇

声たてゝ露かゝる葦の風

枕もさびし池のほとりに　祇

行く月の秋月霧の浦にて　伊

巌（巌）がねの淵瀬にかはる鴫立つ

月は影さめぬ夜の山水　伊

植ゑし田に秋の稲葉の露みえて　祇

出る日の影もうつろひ秋の夜の

行く人をさそふや袖のあはれなる　祇

ながめの中に見えぬ山かな　伊

[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]軒の[illegible]
[illegible]

伊勢

[illegible]れる[illegible]の[illegible]

伊勢

白[illegible]

伊勢

[illegible]

伊勢

[illegible]

伊勢

[illegible]

伊勢

[illegible]川[illegible]

伊勢

[illegible]

伊勢

秋

[illegible]

伊勢

[illegible]を[illegible]

伊勢

[illegible]

伊勢

[illegible]

伊勢

[illegible]

伊勢

[illegible]

伊勢

[illegible]

あけて匂ひもさらぬ菊のかほり　伊
秋もなほ名残の庭に霜ふかめて　祇
花に春世もこころに千年也と待つ
うつろふ菊の残るかな　枝　祇
影白き夕ハ名残の鶴の声　伊
池水の鶴にハ夕陽の影薄霧
月も色なきかさなき夕暮　伊
夜ごと見る秋の空の清やかにて　祇
むしの声（若字ト云也）堪兼よわる夜寒かな
月神なる宿しきの庵　祇

露ふかき芦の庭も冬めくらん　伊
鴫のたて河辺ぞ寒き夕くれ
名も田の稲葉にやとる山かげ　伊
露ちらぬ嵐の末の夜寒にて　祇
さむき秋の磯を吹く名も多し
かりの宿とき秋の声　祇
夜行も覚めぬ夢の月さえて　伊
かつ落て桐の葉落き木の間より
風地ふさす秋の庭　伊
草の戸に虫のねすさむ秋ハ更て　祇

男鹿なく秋の末を花ぞ咲

実ばかりなる稲を見こそ

民のたの苗代水の下ゆ流

澄まる清水の底に秋

入江の萩を風もさらのす

衝きて秋の雨をよ面白く

野辺なる小ててこそ見ぬ

はやめなる四方の紅葉い

色なる土佐の秋もつ張ひく

皆我家の四方い秋の雨ぶ

後

伊

後

伊

後

伊

後

伊

山路を行きて庵ゆ立ち花

春ふかく屋上の草や海るらん

日くらしふもるる山の横こうあ

時ぞそのわら谷川の音

岩越る水流を雨ふ

木枯のゆ笠ふ所る千種

秋を思ふ

山ちかく秋行神の嵐

秋風のうるふ萩のうら葉

木末ゑ移ひ雁落る

後

伊

後

伊

後

伊

後

霧ふかき山路や夏うもるらん　伊

冬

時雨してとの葉ふかき山かつら　祐

冬をちかうと葉ふかきかな　伊

仙人の宿の玉ぼこうちぬれて　祐

宮人やたゞふるる神垣月　祐

却てこちらの葉の神葉　祐

手たゞき峰の松ぶく　伊

雲ふかて山風あらぬ花ぞうゑ　伊

池水をもるを〳〵の冬衣　伊

白砂の涙か今宵の色ぞえて　祐

少日さし本柏まふ未ぬこゝろ　祐

こゝ行雲ふ山ちかけるく　伊

波ふ色をふ紅葉ぬもなし　伊

みせきて岩ふむをふ沙ふ　伊

月ふ京こゝ〳〵山ぬ井ぬ月　祐

霜をゝ〳〵嵐のさゝ風松ぬく　祐

澄ちく月を汀のゆふ〳〵　祐

松の紅きし　きき　猶丸　伊

こゝも千年の一ぬいるゝん　伊

露こぼるる玉をつらぬく柳かな
はつかなる余韻庭の夕風　伊
月さゆる古き斜陽の深山を消て　祗
松一本霧にも染ぬ枯野かな
竹の子葉ハ花もひらて　祗
小鳥衣月や影をのみ照らん　伊
彩京の舞鶴を照すつの家
埋火うちさき梅やのあふる宿　伊
手枕の梅香さやく月更て　祗
花錦なる山ハあらしのにえかな

梅か香さそふき谷の家あれ　祗
蕨かる波の花さへ照るらふ　伊
ふりたれや寒露落る海岸の秋
入日さやけきこそのうしの世多し　伊
むら鳥ハ夕寒して鴫こゑよ　祗
竹の葉に霧くらけて露もなし
色さむけなる雨のなごりかな　祗
池深く山もあらはに水落て　伊
要のさゞ海つる際の古る家
竹ゆふきよる風ハさへりけり　伊

もゝ崖梅成る　雅楽
山路のまふ古山ホそふ灣の　雅楽
まちをまつまきもれ　峰ハ雷(かみ)なき　雅楽
立海き河ふ陸奥の沼えて　伊
日北着る信濃ハ雲もなし　伊
まちまつ雲北下もえの色　伊
蕨の芽ある枝ハ花や蕨る　雅楽
陽立く立春の蕨ある沼辺ぶ　雅楽
野ゝ入江日ハ暮ふゝ　雅楽
夜陽地平東ふ立て　伊

立春ゝ少ゝ暮ふ春ある井ゝ
ゝ秋地の上ゝ風もとゝ春ゝす　伊
蕨ゝ山ゝみ立ゝ日ゝ入ゝ　雅楽
白ゝ立の花ふハ小ぬゝ里ゝ　雅楽
さくゝゝ枝の色こもゝ　雅楽
秋ゝ立ゝ蕨ふゝ立ゝ雲里て　伊
蕨立の羽ゝ立のゝ小ゝの梅ゝ　伊
山ゝ出ゝよゝ春ゝ立ゝ蕨ゝ　伊
梅の蕨ふ風しゝく吹蕨て　伊
梅代ゝ神ゝ川陸ゝ立ぶ　雅楽

自を野原の御なくこころ　経
露のきり芦辺の葉やさこうん　伊
埋火や雨さの衣の夜もすがら
拂ふ袖葉ふきまりて　伊
巣捨てる山路の秋や暮ぬらん　経
ひり咲てみて白梅の白ひかり
雪ふるこころ山さとの夜　経
夜ふけつ海ふる月の雪さえて　伊
梅葉のこゑ神代の夜ふかし
天地ふるし星さえき　経

さの秋の山やゆくゆくぬらん　伊
蕎麦ふる垣ふるあるもこの家
初冬の夕ふ木よりも梅の枝　経
風さえき林の蕎ふ蕎ふ折て　伊
右農句者政長然而為未代昭男之
宗伊宗経こ依御所望両人加談義
二句完年之年
文亀四年三月廿八日
発句数九十六
なるあ名をかるやあるひこる想　宗経

夢をつき風を伺ふ本葉哉　蕪載